

## 平成22年「野球殿堂入り」記者発表

事務局長 佐藤 宏

1月12日(火)午後3時より野球体育博物館殿堂ホールにおいて平成22年の「野球殿堂入り」記者発表が行われました。今回は競技者表彰部門で東尾 修さん、故・江藤 慎一さん、特別表彰部門で故・古田 昌幸さんの計3名が殿堂入りされました。加藤 良三理事長の挨拶につづいて、米谷 輝昭代表幹事より競技者表彰委員会の選考過程について、また西田 善夫議長より特別表彰委員会の選考報告がありました。併せて、西田さんは今回の特別表彰委員に新たに長嶋 茂雄、張本 勲の両氏が加わられたこともご披露してくださいました。引き続き、加藤理事長より、殿堂入り通知書が授与され、顕彰者のご挨拶に移りました。

最初に登壇された東尾さんは、受賞は関係者のみなさんのお陰ですと述べたうえで、入団当時は考えもしなかった殿堂入りですが、昨年ある程度の票が集まったと聞き、自分の事として意識するようになった。振り返れば、ここまでよく頑張ってきたと思う。と往年の強気のピッチングと比較すると、ややおとなしいご挨拶でした。ゲストスピーカーの山本 浩二さんは、チームもリーグも違う私がここにいるのを奇異に感じる方もいるかも知れないが、実は2人はドラフト同期であること、対戦数は少なかったが、切磋琢磨の相手として常にお互いに意識していたことなどを話して下さいました。

続いて江藤 慎一さんの実弟であり、今般、慶応大学野球部監督に就任された江藤 省三さんが登壇されました。志半ばで亡くなられたお兄さんの無念を思い感極まる場面もありましたが、思い出を訥々と語って下さいました。ゲストの杉下 茂さんは、江藤さんが入団当時の中日の監督をしておられました。「低い球やワンバウンドには上からグラブをかぶせてしまう、いわゆる“バツ捕り”という悪い癖があり、守備は不安だった。しかし、外角の球でもレフト方向に引っ張る豪快なバッティングは、大変魅力的だった。」ここから話は少し横道に逸れ始めます。「第一次長嶋内閣で巨人軍のピッチングコーチを勤めた時、投手陣強化の必要性を感じ、江藤さんが監督をしていた太平洋クラブライオンズへ補強の打診をした。その結果成立したのが加藤 初投手のトレードであり、その際、東尾さんも候補のひとりだった。」突然の話に、会場は大いに沸きました。

引き続き古田 昌幸氏夫人・淑子さんが登壇され、謝辞を述べられました。最後に日本野球連盟副会長の鈴木 義信さんがゲストとして登壇され、古田さんに関する様々なエピソードを紹介して下さいました。とりわけ東京・博多間の車中での発言が、「駅弁買おうか」の一言だけという寡黙ぶりには驚かされました。

その後、殿堂入りの方々の写真撮影を行い、多数の報道陣のご出席により熱気あふれる雰囲気の中、記者発表は無事終了しました。

なお、表彰式については東尾さん、江藤さんは7月23日(金)に福岡ヤフドームで、古田さんは東京ドームで行われる都市対抗野球開催中に行う予定です。



左から 古田 淑子氏、東尾 修氏、  
加藤 良三野球体育館理事長、江藤 省三氏



後列左から 鈴木 義信氏、山本 浩二氏、杉下 茂氏  
前列左から 古田 淑子氏、東尾 修氏、  
加藤 良三野球体育館理事長、江藤 省三氏



## 競技者表彰委員会

第50回の競技者表彰委員会は、プレーヤー部門から、200勝投手で元西武監督も務めた東尾 修氏（59）を、同エキスパート部門からは史上初めて両リーグで首位打者となった故・江藤 慎一氏を野球殿堂入りに選出した。

記者発表に臨んだ東尾氏は「殿堂入りを意識したのは去年。今年は心ひそかに期待していた。プロに入ったときは夢にも思っていなかった」と話した。実働20年間で2度MVPを獲得し、通算251勝247敗の成績を残した。投手としては初の1億円プレーヤーにもなっている。そんな球歴を持つ右腕も、箕島高（和歌山）から西鉄入りした1年目（69年）には野手転向を考えたという。未勝利（2敗）に終わり「自信をなくした」と振り返る。それが同年オフ、球界を揺るがした「黒い霧事件」が起きて主力が抜け、そんな思いとは関係なく投手を継続することになった。2年目に11勝18敗、3年目に8勝16敗、4年目には投球回が300イニングを超え18勝25敗という成績を残した。「不幸なことが起こったけど、僕にはチャンスだった。実戦であれだけ投げられて自分でコツをつかんだ」。日本記録として今も残る通算165与死球は、投げ続けることで身につけた制球力を生かし、打者の内角を鋭く突く投球術を表している。



東尾 修氏

写真提供：ベースボール・マガジン社

ライオンズ一筋の野球人生ながら、球団名は西鉄、太平洋、クラウン、西武と変わった。75年の太平洋で

は江藤氏が監督だった。恩師とともに殿堂入りとなったが、入団2年目からの監督である故・稲尾 和久氏への感謝も忘れなかった。「親にも殴られたことがないのに、稲尾さんには殴られた。でも怖さはなかった。優しさや人の良さを感じた」。目指した稲尾氏の勝利数（276勝）にこそ届かなかったが、その恩師のあとに続く殿堂入りを果たした。

江藤氏はその豪快な打撃で全盛時代のONの前に立ち上がった。「闘将」の呼び名がぴったりの強打者だった。あいさつに立った実弟の省三氏（67=慶大監督）は「（殿堂入りしているのは）雲の上の人ばかり。その一員に兄が…」とあって絶句、涙を流した。江藤氏は社会人の日鉄二瀬から59年に捕手として中日入りした。打力を生かして野手に転向し、64、65年には連続首位打者を獲得した。このとき王（巨人）は本塁打、打点の2冠で、打率はともに2位。江藤氏が3冠王を阻んだ。ロッテ移籍後の71年にも首位打者を獲得して初の両リーグ制覇となったが、これは今もただ1人の記録だ。



江藤 慎一氏

写真提供：ベースボール・マガジン社

若かりしころの江藤氏を知る関係者は「毎晩のように飲み、深夜に戻ると、その勢いのままバットスイングに取り組む豪傑だった」と話す。その一方で、4人兄弟の長男として、弟たちの父親役を務める家族思いの人でもあった。中日入団後には一家を名古屋に呼び寄せ、弟たちの学費も負担した。省三氏は「兄は高校卒だったんで、弟には大学も行かせるっていうね。5歳違いでしたが、父親でした」と当時を思い出す。



08年2月28日に70歳で死去した。「ちょうど三回忌になるんです」。省三氏は来月28日、江藤氏が眠る伊豆を訪れ、殿堂入りを報告することになっている。

プレーヤー部門は、野球の取材に関して15年以上の経験を持つ委員(317名)が、7名連記で投票した。当選必要数は228票。東尾氏は254票を集めて殿堂入りを決めた。昨年、次点に終わった落合博満氏(現中日監督)は今年も昨年と同じく1票届かなかった。エキスパート部門は、競技者表彰の幹事と殿堂入り競技者(48名)が3名連記で投票、江藤氏が当選必要数の32を上回る37票を集めて、同部門から2人目の殿堂入りとなった。

(競技者表彰委員会代表幹事 米谷 輝昭)

## 特別表彰委員会

特別表彰委員会の選考対象が「主にプロ・アマの組織や管理に関する方」並びに「アマチュア野球を引退した競技者」と、野球界を支えた方に広がって3年目の今年、欠員となった選考委員に、殿堂入りの先輩でもある長島茂雄、張本勲両氏を迎えることになり、定員の14名が揃いました。

昨年11月の小委員会で殿堂入り候補者10人を厳選しました。

新しい候補として、

- ①スコアラーの草分け、  
元南海ホークス・尾張久次氏
- ②戦後のスポーツ界で  
アメリカとの交流に尽力した松本滝蔵氏
- ③戦前の甲子園で県立岐阜商業の投手として  
春夏に優勝した松井栄造氏
- ④和歌山県立箕島高校を率いて  
春夏連覇を含め4回優勝の監督・尾藤公氏
- ⑤クラブ造りの名人、大リーガーも  
「マジックハンド」と呼ぶ・坪田信義氏

以上5人が加わりました。

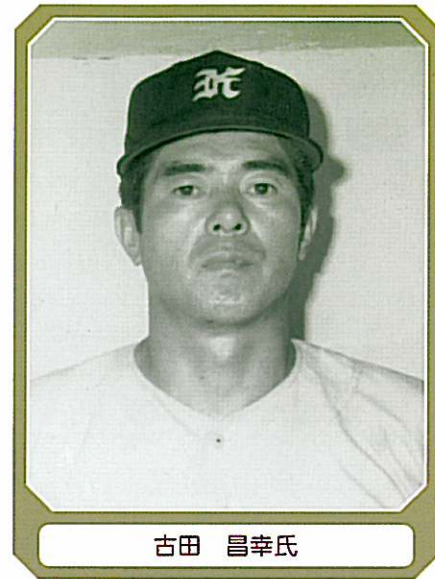
1月8日の委員会はプロ野球元役員、高野連、学生野球、日本野球連盟、学識経験者、ジャーナリスト、さらに殿堂から長島、張本両氏が加わる広範囲からの人選で、活発な意見が交わされました。

投票人は14名、3名連記で殿堂入り必要得票75%は「11票」でした。

投票結果は

- |         |     |
|---------|-----|
| ①古田 昌幸氏 | 12票 |
| ②長船 騏郎氏 | 9票  |
| ②大本 修氏  | 9票  |

こうして古田 昌幸氏の殿堂入りが決まりました。



古田 昌幸氏

写真提供：毎日新聞社

古田 昌幸氏は1933(昭和8)年熊本に生まれ、52(昭和27)年九州学院から立教大学に入学、1年から二塁手として活躍、2学年では立教大学20年ぶりの優勝を成し遂げました。56(昭和31)年に熊谷組に入社、都市対抗で首位打者となり準優勝、翌年には勝負強いバッティングと抜群の守備で熊谷組の初優勝に貢献しました。

毎年の世界選手権大会にも参加し、57(昭和32)年の日本代表優勝の原動力となり、何度もプロ野球から誘われたにもかかわらず、アマチュア一筋を貫きました。寡黙な古田さんは自分の野球人生にも一徹を通しました。

66(昭和41)年、熊谷組の監督兼選手として都市対抗に優勝、自らサヨナラ本塁打を放つなど陣頭指揮にあたり、橋戸賞を受けました。

ユニフォームを脱いだ後も、企画渉外委員長を経て、常任理事に就任。都市対抗の充実に尽くした功績で特別功労賞を受けました。

1999(平成11)年7月30日に65歳で死去。立教大学後輩の長島茂雄氏が委員に加わった年に殿堂入りが決まったことに、野球の「えにし」を感じます。

(特別表彰委員 西田 善夫)



## コラム／博覧・博楽 (33)



## “長嶋 茂雄研究の背景は欲求不満と激怒”

平松 忠俊（長嶋 茂雄研究家）

## “ここぞの好機に5割以上”

私が長嶋選手の研究を始めたのは、欲求不満と激怒がその主な要因であった。躍動感溢れ、絵になるランニングスローを展開した三塁守備、常に次塁を狙う積極果敢な走塁もさることながら、長嶋選手の“ミスター・プロ野球”たる所以は、勝負所の好機で“必打”の様にファンの期待に応えてくれた稀有の勝負強さにあった。

私は現役時代から出版社、新聞社でこの好機での打率を調べ掲載して欲しいと願い、長嶋選手が現役引退後はさらにこの願望が強くなり、10年以上持ち続けた。

この間、報知新聞社から『定本 長嶋茂雄』が刊行され、この中に記録資料編があり、チャンスバッティングと称し、トータルのチャンス打率と走者別の打率は記述してあった。しかし、これでは長嶋選手の真の勝負強さは分からない。真のチャンス打率を出すには、“一打同点・逆転・勝ち越し・先制・サヨナラ”と言う場面別の打率か、“勝負所の終盤チャンス打率”を算出してこそ、長嶋選手の真骨頂が分かるが、その記述はなかった。

私はその後も待ちに待った。記録の掲載では日本一と思われるあるスポーツ新聞の記録関係者にも電話ではあるが、「こうしたチャンス打率を何とか掲載してもらえませんか。」と頼んだ。だが返ってきた回答は「こういう記録を出すには、アルバイトを何人も使用し、かつペイ出来なければ無理…」と言う誠意の無い、通り一辺の返事であった。当然電話する前からこの様な回答は予想したが、余りの誠意の無さに、私は激怒した。

そして、私は決意した。もはやいつまで待ち続けても出ない。ならば、資料をかき集めてでも自らの手で長嶋選手の真のチャンス打率を出し、日本プロ野球を隆盛に導いた“史上最高・最大のバットマン”の知られざる記録を、後世に伝えていこうと決意したのである。

やがて、日刊スポーツで「好きな紙面をコピーします。」と言う企画があり、私は新聞社に出向き、日本シリーズの各イニングの全ての経過を掲載した資料を入手し、この資料をもとに日本シリーズの私がマスコミで掲載して欲しかった“一打同点・逆転・勝ち越し・先制・サヨナラ”の打率を算出した。この結果、本領を発揮した全盛期で5割3分3厘(走者二塁以上)、走者一塁も含めたこうした場面には打率5割8分6厘なる驚愕の記録が浮かび上がったのである。

だが公式戦の“一打同点・逆転・勝ち越し・先制・サヨナラ”の場面での打率までは資料が無く、スコアカードも無い私は日本シリーズの記録までが限界とあきらめていた。あきらめてはいたが、頭の片隅にはその想いが消えなかった。

そんなある日、電車の中である選手の推定年俸の記事を目にした。私は実際には異なることも多いのによく掲載するものだ、とその記事を見ていた。とその時、私の頭の中に電流が走った。「年俸も推定で出すのなら、推定の一打同点・逆転の打率があっても、おかしくは無いだろう。」と、思った。

それからというもの、私は会社での仕事の合間に試行錯誤を繰返し、ついに公式戦の“ここぞのチャンス打率”でもある“一打同点・逆転・勝ち越し・先制・サヨナラ”の打率を算出した結果、1960(昭和35)年~70(昭和45)年における本領発揮の全盛時代には3割8分0厘(王 貞治の全盛時代、2割9分0厘)、生涯でも3割4分4厘(王 貞治3割0分6厘)なる抜群のチャンス打率が私の計算により弾き出された。この記録は、他の名打者である川上 哲治・落合 博満等と比較して見なければ分からないが、少なくともトップレベルの記録であろう。

(「がんばれミスター!英雄伝説」(2004年5月15日 G.B.発行)に”記録から見る長嶋 茂雄の偉業”を執筆しています)



## 殿堂入りの人々を語る (26)

### 「ベースボールの力」を信じた父

牧野 元晴 (牧野 直隆氏 三男)



1996年野球殿堂入り  
牧野 直隆氏レリーフ

父・牧野 直隆の野球人生80年の中で最も印象に残ったシーンを、著書『ベースボールの力』(2003年・毎日新聞社刊)から選び紹介します。「野球人生を支えた一打」と、自ら語る場面です。

補欠の時期が長かった父は、苦手なカーブ打ちなど他の人の何倍もの練習をし、3年秋(1930年)の早慶戦に初の先発出場を果たしました。

試合開始のサイレンの鳴り終わらないうちにショートの前へゴロ。捕球したが、足を滑らせて尻もちをつき、これを契機に初回2点を失いました。その時から頭の中が真っ白で、3回表にもトンネルをし、スタンドの歓声が耳に痛かったそうです。

0対3で早大にリードされた4回裏、慶大に二死満塁のチャンスが訪れ、8番上野さんの代打・梶上さんが四球を選び押し出しの1点をもぎとり、慶大応援団も勢いづきました。次は9番の父の打席。「エラーもしているし、ここは代打か」とベンチで思っていた時、腰本監督が大きな声で言いました。「牧野何してんだ」。奮いたった父はデコボコのアルミカップでうがいをし、「よし、僕の野球生活を賭けてやる」と武者震いをして打席へ向いました。右打席へ入り早大・多勢投手を見つめます。1ボール2ストライクと追い込まれました。次は外角から中に入ってくるカーブを予測しましたが、外角から外れるシュートでした。いわゆるつり球です。とっさに体をいっばいに伸ばし、バットを振り出すようにして打ちました。打球は高く上がり、内野手と右翼手の間にポトリと落ちました。二者生還し3対3の同点とする適時打となりました。(腰本監督も、日頃の練習ぶりを見て代打を送れなかったそうです。)

後日「アサヒスポーツ」の特集で、父は次のように語っています。「二塁上にいる自分“ああ良かった”と思った。自分のまわりが急に明るくなった。今まで嫌だと思っていた沢山の観客が、今度は多いほどうれしくなった」と。それは実に回生の一打でした。「急に自信が出て、落ち着きを得た。胸のつかえが一掃され、気分が一新した。それ以後気も軽く、身も軽く活動できた。この勝ち戦を喜ぶ人の中で、おそらく僕が一番うれしかったに違いないと信じている。その晩はなんとも言い様のない気持ちで眠れなかった。初めてライトを浴びたシーンだった」と述べています。父は私にも「この一打が大きな自信となって、その後の自分の野球人生を支えてくれた」と語っていました。父はこの時から、一筋の長いベースボールの階段を一段一段と上りだしたと思います。

父の身の回りのことなどについてお話をします。

書斎には師と仰いだ3人の写真がいつも飾られていました。西郷 南洲翁、福澤 諭吉先生、天龍寺 管長で兄とも慕った関 牧翁老師。また、書も父を励ましていました。小泉 信三先生の「練習は不可能を可能にす」。その健康体操を自ら日課としていた、真向法体操の長井 洞<sup>はら</sup>先生の「健体康心」。常に主体性を失わず一心に生きる事を説いた、禅宗の関 牧翁老師の「隨處作主」。

鹿兒島出身の父は、郷土の偉人・南洲翁から何を学んだのでしょうか。きっと「敬天愛人」ではないかと思います。父は神仏を敬い、特に皇室の新聞切抜きを集め、甲子園球場で始球式をされた皇太子殿下に、愛子様が誕生された時の写真は、永く机上に飾られていました。

父は日頃から球児ら若者のことを「子供達」と言っていました。亡くなる少し前、病院のベッドの上でも、子供や若者の不幸な事件をニュースで知り、「世の中大変だな。でも僕は、若者を信じている」と確信をもった言葉で言っていたのが忘れられません。

数え切れない球児のお世話をさせていただき、「子供達」の純真さと可能性を信じていた父だからこそ言えた言葉だと、今では思っています。

2006年7月18日。間もなく開幕する夏の甲子園大会を楽しみに、又たくさんの方々との出会いに感謝しながら、最後まで元気に夢を持った95年の生涯を終えました。

生前に関 牧翁老師から頂いた戒名「至誠院禪機球道直隆大居士」が父の一生を物語っていると、私は思います。



## 知ってほしいこんな資料(69)

### 明大野球部ロンドンでの試合ポスター



開催中の企画展『野球のポスター展』(～3/14) から、1929(昭和4)年の明治大学野球部世界一周遠征のロンドンでの試合告知ポスターをご紹介します。

1929年に明治大学野球部は米国遠征を行うに当たり、ヨーロッパ経由で帰国するルートを取り、世界一周の遠征を行いました。明治大学野球部史には、通常の米国遠征と比べて、旅費がそれほど変わらなかったこともあって、岡田 源三郎監督(1978年殿堂入り)が学長はじめ学校関係者をお願いして実現したと書かれています。岡田監督は英語が堪能な松本 滝蔵氏をマネージャーとして野球部に参加させ、松本氏が手続きの一切を行ったそうです。3月15日に出発し、5月31日まで米国各地で試合を行い、大リーグの試合も観戦。それから大西洋を渡りロンドンで試合を行い、フランス、ドイツ、スイス、イタリア、エジプトを回り、船が寄港した香港と上海でも一試合ずつ行い、7月29日に帰国という壮大な遠征でした。ロンドンでの試合会場はスタンフォードブリッジグラウンドとポスターに書かれています。野球場で

はなくサッカーのチェルシーのホームグラウンドで試合をしたようです。6月13日にロンドン在留米国人チームに26対0、16日に米国戦艦ローリー号チームに6対5と勝利しています。大きさは縦31.5cm横20cmと小さいものです。岡田 源三郎監督が持ち帰り、当館開館時に寄贈されました。

学芸員 新 美和子



### こんにちは図書室です



今から61年前の1949(昭和24)年、GHQの統治下にあった日本にサンフランシスコ・シールズが来訪しました。当時の日本は復興に向けて少しずつ進み始めていた時期で、シールズの来日は明るいニュースの一つでした。今回はシールズ来日の時に発行されたプログラムを紹介します。

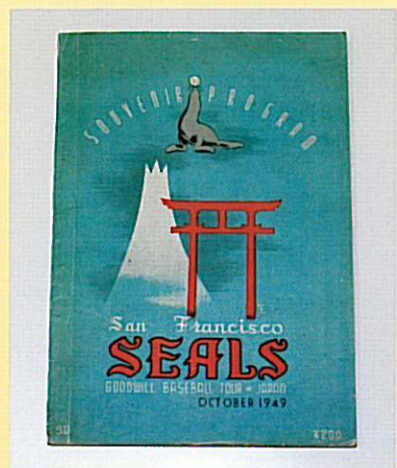
サンフランシスコ・シールズは当時3Aのパシフィック・コースト・リーグに所属していました。そのころ大リーグは16チーム(現在は30チーム)で、AAAクラスはシールズの所属するパシフィック・コースト・リーグを含め3つのリーグで構成され、全24チームが所属していました。シールズは46年にはリーグ1位、47、48年は2位の成績を取めた強豪でした。

シールズは日本滞在中に、日本駐留軍との4試合を含む11試合を行い10勝1敗の成績を残しました。1敗は極東空軍に屈したもので、日本チームには7戦全勝でした。シールズを率いたのは親日家のフランク・オドール監督(2002年殿堂入り)で、10月30日に行われた学生選抜との最終戦は「オドール・デー」として、都内の子どもたちを球場に招待しました。図書室に足を運んでくださる70代の方々からは、今も「オドールさん」と呼ばれ親しまれています。

この時販売された「サンフランシスコ・シールズ・スーベニア・プログラム」は90ページほどが英文で、30ページが和文という珍しいものです。価格は200円で、選手紹介はもちろんですが、スコアカードや日米野球親善に活躍した選手として、沢村 栄治(1959年殿堂入り)や田部 武雄(1969年殿堂入り)の紹介もあります。

図書室ではこの他にも当時の新聞や雑誌で“ボール使節”の活躍を見ることができますので、ぜひご利用ください。

司書 茅根 拓





## ● 維持会員を募集しています！ ●

財団法人野球体育博物館は、昭和34年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万冊を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。

また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。

維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

### ▶ 1. 会員特典

- (1)当博物館発行「ニュースレター」(季刊)送付します。
  - (2)無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
  - (3)アメリカの野球博物館(クーパースタウンにある)にも無料で入館できます。
  - (4)会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
  - (5)イベント情報などを優先的にご案内します。
  - (6)博物館で販売している商品が10%引きになります。
- \*新個人会員には上記の特典のほか、『野球殿堂1959-2009』を進呈します。(ジュニア会員を除く)
- \*新ジュニア会員には上記の特典のほか、「野球体育博物館オリジナルピンバッジ」を差し上げます。

### ▶ 2. 会員の種類と会費

年会費(4月～翌年3月迄)

法人会員	1口	10万円
個人会員	1口	1万円
ジュニア会員(小・中学生)		2,000円

ご入会月により、初年度年会費の割引があります。

ご入会月	4月～9月	10月～12月	1月～3月
維持会費(個人会員)	10,000円	5,000円	2,000円

\*今、ご入会されますと3月までの会費は2,000円となります。

\*2010年度の維持会員も受け付けておりますので、よろしくお願いたします。

### ▶ 3. ご入会の方法

①館内にあります「維持会員募集のご案内」の“入会申込書”に、必要事項をご記入のうえ、係りにお渡しいただくかお送りください。

「維持会員募集のご案内」は郵送もいたしますので、ご希望の方は博物館までご連絡ください。

②“入会申込書”が届きしだい“維持会費のご請求書”をお送りしますので、維持会費をお振込みください。

お問い合わせ 博物館 業務部

皆様のご協力、よろしくお願い申し上げます。

## 博物館からのお知らせ

### 【評議員】

退任 大越 英雄氏

### ● 博物館のご案内

場所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 3月1日～9月30日 AM10時～PM6時  
10月1日～2月末日 AM10時～PM5時  
(入館は閉館の30分前まで)

入館料 大人 500円(300円) | ( )は  
小・中学生 200円(150円) | 20名以上の団体  
65歳以上 300円

#### ● 編集後記

新しい年が始まりました。今年も博物館の“今”をお届けしますので、よろしくお願いいたします。また、ニュースレターのバックナンバー(2004年4月25日発行のものから)を当館ホームページでもご覧いただけますので、ご利用下さい。

休館日 月曜日(祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館)  
年末・年始(12月29日～1月1日)

#### 《2月・3月・4月の休館日》

2月 1日・8日・15日・22日

3月 1日・8日・15日

4月 12日・19日・26日

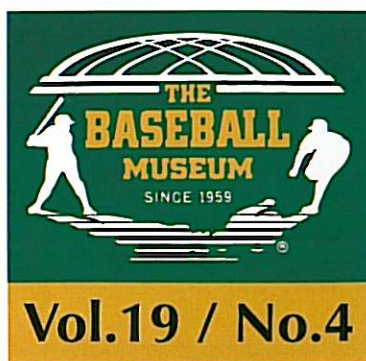
\*3月から閉館時間が18時(入館は17時30分)までとなります。

\*3月16日(火)～4月11日(日)まで無休です。

### Newsletter Vol.19 / No.4

2010年1月25日発行

編集・発行 財団法人 野球体育博物館  
〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61  
Tel 03(3811)3600 Fax 03(3811)5369  
<http://www.baseball-museum.or.jp/>  
定価 100円



## リレー随筆(39)

競技者表彰委員会幹事 鈴木 光 (スポーツニッポン新聞社)

壮絶なシーンが、甲子園のライト側アルプス席の下で繰り広げられていた。

2009年9月12日。雨模様の甲子園。ダイビングキャッチを試み、倒れた赤星はトレーナーに背負われ、グラウンドから消えた。その後のことを、後日聞く事ができた。

ブルペンでの応急処置がはじまった。だが、もう赤星の体は自力で動かすことができない状態だった。雨と汗で濡れたユニホームが、赤星の体温を奪う。「ユニホームを脱がせなあかん」。聞こえた声に赤星も反応しようとした。だが、手も足も動かせない。しばらくして、ハサミの音がしはじめた。

「何とかしようと、みんなでユニホームを切ってくれているんだな、ということは分かった。ユニホームがなくなった後はタオルに包まれて、それで救急車で運ばれたんです。」

病院では両手首に残っていた赤いリストバンドも切断された。赤星のトレードマーク。それがカットされた瞬間、引退へのカウントダウンが始まったのだ。

3回2死満塁。マウンドには福原。打席は内川だった。雨で48分遅れたゲーム。赤星はこのとき、守備位置を2歩、3歩と右中間寄りに詰めていた。「内川は足の状態が本調子じゃなかったから、引っ張ることはできないと考えました」。読み通りに打球は右中間へ飛んだ。赤星は迷わず打球に飛び込み、そして首に大きなダメージを受け、倒れたのだった。

いくつかの、たら、れば、を考えずにはいられない。もっと強く雨が降って、中止になっていたら…。もし、守備位置を変えていなければ…。しかし、赤星はすべてを受け入れていた。「100%の力を出さないと他の選手に勝つことができないと思ってやってきた。あの場面も捕れると思って飛び込んだ。捕れなかったことは残念だけど、飛び込んだことは後悔していません」。

診断結果は「中心性脊髄損傷」。手足の指1本ずつ動かすリハビリで再起を目指したが、抱えたりスクは消えない。命にも関わる問題。球団との話し合いを重ね、暮れの12月9日に電撃的な引退発表。阪神ファンだけでなく、多くの野球ファンが、その決断を惜しんだ。2003年、2005年と2度のリーグ優勝に貢献。長い低迷が続いていた阪神が強いチームに変貌する過程で、赤星のスピードが強い存在感を与えた。実働9年で通算381盗塁は呉昌征(毎日)と並ぶプロ野球歴代9位だった。

ドラフト4位入団のノン・エリート選手の活躍は、球界にも刺激を与えた。敏感に反応したのが巨人だった。赤星の活躍を受け、「なぜ巨人は赤星を取らなかったのか」とチェックに取り組んだのが清武英利球団代表。FA補強による重量チームのモロさを認めた上で、ドラフト戦略を大幅に見直し、一芸に秀でた選手を育成枠で獲得する路線を進めた。

「うちも赤星くんのような選手が出てくるようなチームにするよ」と赤星は清武代表に声をかけられたことがあった。その言葉は山口、松本ら育成出身選手の台頭で現実のものとなり、巨人はリーグ3連覇を達成。赤星は日本のプロ野球の可能性を広げることに一役買ったと言っても過言ではないだろう。

「甲子園だけでなく、全国の球場で熱い応援をしていただいた。ファンの方には本当に感謝しています。ユニホームを脱ぐことにはなったけど、野球が好きだし、野球をボクから取るのは無理。野球の素晴らしさをこれからも伝えていきたい。車いすを贈る活動も、もちろん続けていきますよ」

入団1年目のキャンプ。ほとんど外野にも飛ばなかった赤星のフリー打撃を覚えている。その話題になると「だから9年間で2割9分5厘という打率を残せたのは、ちょっと自慢したいんです」と笑った。ラストゲームで着ていた53のユニホームは、その切れ端も手元には残っていない。完全燃焼を文字通り実践した野球の虫は、2月キャンプから、取材者として、球場に通う。